

AFTERNOON TEA

徳島大学大学院 ヘルスバイオサイエンス研究部
統合生理学分野

近久 幸子

「国際学会体験記」

花王株式会社・ヘルスケア第2研究室の大野洋美さんからのご紹介で寄稿させていただくこととなりました。大野さんは徳島大学大学院での先輩で、研究面はもちろんのこと、お酒の席でもいろいろとお世話になりました。大野さんから教えていただく焼酎はいつもおいしいものばかりでした。私は昨年度、徳島大学大学院・統合生理学分野にて学位を取得し、現在も同じところで研究を続けております。昨年、大学院生最後の年に、カナダとアトランタでの国際学会に参加させていただきました。初の国際学会参加ということで、もうドキドキの連続でした。生理学会誌で他の学会の話をしていただくのは恐縮ですが、当時学生だった私にとってはとても貴重な体験だったので、その時の出来事に触れさせていただきたいと思います。

まずは昨年5月にあったカナダのウィスラーでの学会ですが、これはIBNS (International Behavioral Neuroscience Society) という比較的小規模な学会でした。ウィスラーといえば夏はマウンテンバイク、冬はスキーのリゾート地です。山の麓にホテルやコテージ、レストランやショッピングセンターが立ち並び、美しい町のはずれには雪解け水が流れる川があるまさに癒しの空間でした。5月下旬といえども朝晩は冷え込み、厚手のジャケットを持ってこなかったことを後悔したものです。せっかくスキーのメッカに来たのだからと、学会の合間にスキー場につながる山へリフトで登ってみました。リフトから見下ろすと、始めはマウンテンバイクで急勾配な山道を下る人達が見えました。しばらくリフトに乗っていると山の中腹あたりから雪が降り始め、頂上に着く頃には

完全に別世界、学会場やホテル街からは想像のつかないような雪景色が広がっていました。そこは普通にスキー場となっており、スキーヤーばかりの中で、スーツ姿にヒールを履いた私達の姿はさぞかし異様な光景だったことでしょう。山の麓を熊がウロウロ歩いていたのにも驚かされました。さて、肝心の発表はというと、ポスター発表だったにもかかわらず緊張のあまり何を質問されて何を答えたのかいまひとつ覚えていません。ただ、お酒や軽食をとりながらのアットホームな発表会場だったことは記憶しています。

次に11月にあったアトランタでのSfN (Society for Neuroscience) ですが、こちらは多くの方がご存じのことと思います。参加人数3万人という大規模な学会ということで、まずは学会場での人混みに唖然とさせられました。これだけ多くの人達がNeuroscienceの分野で研究してそれを職業とし、こんな世界で私自身もこれからやっというとしていと思うと、それだけで何だか気が遠くなっていく感じがしました。学会自体の雰囲気



写真：カナダ・ウィスラーにて。大分大学の森島さん(左)と筆者(右)

気に圧倒されて、発表までにどんどん憂鬱になってきている自分がいました。しかし、企業ブースでグッズをいただきつつ、とてつもなく広い会場をグルグルしながら、論文でいつも見かける人のポスターを発見した時には、最先端の研究を近くで垣間見ることができたことに興奮し心拍数が上がったのを覚えています。発表本番は（初回よりは若干マシだったものの）やはり大いに緊張しましたが、学生から大御所まで、実にバラエティーに富んだ方々が来られ、様々な角度から質問され

てとても勉強になりました。

私のたどたどしい英語にも、みなさん親切に耳を傾けて丁寧なアドバイスをくださって（もちろん厳しいご指摘もうけましたが）、いろいろな意味でどちらの学会もとてもいい経験になりました。まだまだ研究者としてスタートしたばかりですが、いつかは緊張せずに国際舞台に立てる日がくることを夢見ながら、英語力はもちろんのこと、充実した研究生生活をおくることができるように日々鍛錬していきたいと思うばかりです。

日本医科大学大学院医学研究科システム生理学

加藤 昌克

“Plowing My Own Furrow”の 想いで

日本歯科大・武田守さんからバトンを受けました。武田さんとは群馬大学内分秘研究所生理学部門（当時）で一時をともにしました。

10数年前に英国ケンブリッジ郊外のBabrahamにある研究所に2年間いましたが、そのおりアフタヌーンティーを楽しむ機会がありました。庭の緑をみながら、生クリームをたっぷりぬったスコーンと何種類かのサンドイッチを紅茶で楽しみました。ゆったりとした午後の会話のときでした。今日の話は、1970年代のニューヨーク州の田舎での話です。

私はサイエンスの世界に入る前に、アルバイトをしながら5年ほど旅をしていました。英語で言うvagabondです。その中で、生涯忘れることのない出会いがありました。ニューヨーク州Cherry Valleyという湖水のある田舎町に住んでいたHoward and Louis Moore夫妻と出会ったことです。当時80歳を過ぎていたと思います。私と初めて会った時、彼は私の手をにぎり、「日本の人と会ったら言おうと思っていた、原爆を落として本当に申し訳なかった」と私の目をみて言いました。そのあと、コーヒーを飲みながら、また食事をしながら、いろんな話をしました。夫妻との交流は、彼が103歳でなくなり、数年後にLouisさんがな

くなるまで続きました。夫妻は敬虔なクウェーカー教徒で絶対平和主義者でした。Howardさんは第一次大戦の時に兵役を拒否（良心的兵役拒否、conscientious objection）し、獄につながれています。その思想は生涯変わることはありませんでした。良心的兵役拒否の思想を実践した人を直接知ることができたことは、私に大きな影響を与えました。ただ単なる平和主義ではなく、同時に現実をみる鋭い目をもっていました。すなわち、現実主義に裏打ちされた絶対平和主義です。興味のある方は彼の著書（“Plowing My Own Furrow” 1985 Syracuse University Press）を御覧下さい。彼がこの生き方を貫くことによって得たものと失ったものは何だったのでしょうか。おそらく得たものは掛替えのない友人だと思います。同時に失ったものも掛替えのない友人だったと思います。彼が兵役拒否をしたのは第一次大戦のときです。私が彼に出会ったのは、それから半世紀以上あとの1970年代です。その時、彼は言いました。「この村は小さい。それと同じようにここの人の心も小さい。表面的には付き合ってくれるが、けっして心を開かない」。

このような出会いのあった放浪生活に終止符を打ち、私は生理学の道に入りました。その後、30年余の時間が流れています。視床下部下垂体系の研究をしながら、ときにHowardさんとLouisさんのことを思い出します。

Afternoon Tea 一部休載について

Afternoon Tea 第55回は、県立広島大学福場良之先生のご推薦により、姫路獨協大学・上月久治先生にもご執筆をお願いしておりましたが、去る6月8日に上月先生は急逝され、現在、ご遺稿の有無を確認中であります。結果が明らかになるまで、3本の連載のうちの1本は休載させていただきます。ご了承ください。

上月先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

日本生理学雑誌編集長 小西 真人
Afternoon Tea 担当編集委員 渡辺 賢
